**公開ワークショップ**

**日中文化交流における「モノ」・「ヒト」・「コト」**

**◇プログラム：**

**【総合司会】**

朱　　琳　（東北大学大学院国際文化研究科・准教授）

【**特別講演**】

**内山　籬（内山書店・店主）**

1945年生まれ。1968年内山書店入社。1978年代表取締役社長就任。現在に至る。

**題目：「魯迅、内山完造と内山書店――日中民間交流の場としての百年」**

1917年上海で誕生した内山書店は、もともと在留邦人にキリスト教関係の本を販売していたが、やがて在留邦人のみならず中国人の客も増加し、幅広いジャンルの本を扱うようになった。内山書店はそこで出会う中国人と日本人の客が雑談をかわすうちに、内山完造を仲立ちとして「文芸漫談会」ができるなど、日中交流の場となっていった。1935年、内山完造の勧めで弟内山嘉吉が東京で、日本人に中国の本を提供することを主な目的に内山書店を開く。

**【発表１】**

**稲畑　耕一郎（早稲田大学文学学術院・教授）**

早稲田大学第一文学部卒業、同大学院文学研究科博士課程修了。これまでに南開大学東方芸術系客員教授、北京大学中国古文献研究センター客員教授などを兼任。早稲田大学中国古籍文化研究所所長。専門は中国古典学。

**題目：「失われた漢詩創作での交流――テキサス州アラモ遺跡の漢詩碑を見て考えたこと」**

テキサス州アラモ要塞を巡る戦役は、アメリカ合衆国の創世記を語るときには必ず言及される重大な歴史事件であり、この半世紀の間にも何度も映画化されてきているので知る人も少なくないのではないか。しかし、その多くの若者が犠牲になった壮絶な戦いの跡に、今も百年前に日本人が建てた鎮魂の漢詩碑が存在することを知る人は少ない。その詩碑を建てたのは地理学者であった志賀重昻（しが　しげたか）である。志賀の名は『日本風景論』の著者として記憶に留められており、その著作が若者たちの間に近代登山の気風を生みだしたことを知る人もいるに違いない。しかし、彼が世界を歴遊する間に作った数多くの漢詩に言及する人はない。アラモ要塞の漢詩碑を見て、近代日本の知識人おける漢詩創作の盛衰について考えたことを話してみたい。

**【発表２】**

**塚本　麿充（東京大学東洋文化研究所・准教授）**

東北大学文学部史学科東洋･日本美術史専攻卒業、同大学院文学研究科博士課程修了。博士（文学）。大和文華館学芸員、東京国立博物館研究員を経て、2015年より現職。専門は中国絵画史。

**題目：「日本近代の中国絵画コレクションと中国学」**

1910年、内藤湖南は敦煌文献調査のために訪れた北京で、今までの日本にはコレクションされていなかった中国の正統絵画に出会い、帰国後主に関西の財閥にそれらの購入を強く勧め、ここに従来までの江戸時代までのコレクションとは全く異なる、関西の中国書画コレクションが形成されることとなった。この新しいコレクション形成の波は、江戸時代までの日本で蓄積されてきた中国書画への莫大な知識体系に大きな自己変革を迫ることとなった。中国研究の趨勢が「漢学」から「中国学」へと大きく変化する中で、中国の伝統書画に関する姿勢はどのように変化していったのであろうか。また日本が中国研究の先鋒を担っていた時代、欧米の中国絵画認識へとどのような関係を結んでいくのであろうか。ここでは実際の作品調査で見出された新資料や収蔵家へのインタビュー事例を踏まえながら、日本における「中国美術」認識の足取りをたどっていきたい。

**【全体討論】**

　講演者、発表者のほか

三浦　秀一（東北大学大学院文学研究科・教授）

佐竹　保子（東北大学大学院文学研究科・教授）

　勝山　稔　（東北大学大学院国際文化研究科・教授）